

## 会 議 記 録

高松市附属機関等の設置、運営等に関する要綱の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	令和5年度 第2回高松市教育振興基本計画策定懇談会
開 催 日 時	令和5年11月15日（水）午前10時～11時
開 催 場 所	高松市役所 11階 114会議室
議 題	次期高松市教育振興基本計画（案）について
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上 記 理 由	
出 席 委 員	柳澤会長、山口副会長、阿部委員、笠井委員、川上委員、竹内委員、松本委員、村川委員
傍 聴 者	0人（定員10人）
担 当 課 及 び 連 絡 先	教育局総務課（839-2611）

### 会議の経過及び結果

小柳教育長挨拶の後、会議公開の了承を得、次の議題について協議した。

次期高松市教育振興基本計画（案）について

事務局から説明

以後審議

（会長）

基本計画の内容につきまして、丁寧に御説明いただきました。

前回の変更点、新しい視点から始まって、各項目のポイントになるところを取り上げていただきました。それに伴って施策の指標を22項目挙げていただいています。御説明いただいたところにつきまして、御質問等をお願いいたします。

（委員）

学力に関し、数値で測れる学力か、最近、本当に大事だといわれている非認知的能力というような学力、どちらなのかということを考えながら聴かせていただきました。確かな学力の育成として指標にするときに、学校に行くのは楽しいと思う児童生徒の割合を上げていただいたのが、ありがたいと思いました。子どもたち一人ひとりが、「学校に行って学ぶのが楽しい。友達と一緒に成長するのが楽しい。」という実感を持てるような学校になるために、私達、市民一人ひとりが何をしなければいけないのかというところを、施策として提示していただき、議論や大人が

共有できるような流れを作っていたらと思っています。

学力というときに、数値で見える学力・学習状況調査での算数の点数で見るのではなく、「学校に行くのが楽しい」と思う子どもたちが増えていくことが、結局、不登校児童生徒の支援や特別支援教育の推進につながっていくのではないかと思います。

(会長)

学校の雰囲気や学校の風土をどう作るのかは、非常に重要なことです。ドイツでは、学校を民主主義的な空間にすることを非常に重視しており、しっかりと自分の意見が言える、また、皆もそれを聞いてくれる場にしようと取り組んでいます。学校をどう作るのかということにつながる御指摘で、このようなことがあれば、もっと勉強したいという気持ちが出てくる、そして、学校に行きたいと思う、そのような指標だと思います。

(委員)

施策の指標を見させていただき、学校現場でいる教職員が普段から気にして、見て、分析している調査項目等が掲げられており、ありがたいと思っています。働き方改革の面から見ても、学校が常に気になっているデータ指標であり、計画に対してどうであるか改めて調査をやり直すことが少なく済む指標であると同時に、重要な指標だと思っています。

(委員)

グローバル人材の育成として、小・中学校の英語教育の取組について、子ども会と共催で作製した「かるた」の英語版を活用するなど、国際的な視点を踏まえた地域の愛着を育みます、となっており、子ども会で作った「かるた」の英語版を作製し、2月の新春子どもフェスティバルで、それをお披露目できるかと思っています。

私の経験ですが、外国の人に英語で道を聞かれているけれど分からない、身振り手振りで教えています。やはり日常的に英会話ができない人が結構いるのではないかと思います。子どもの頃から英語に触れさせて、英会話ができるような教育、子どもだけでなく大人も英会話ができるような環境が、これから国際社会になっていくためにも大事だと思っています。英語教育の取組を、もっと進めて、高松市の特徴として、高松市は誰が来ても、どんな人でも英会話ができるというような街になったらよいと思いました。

(会長)

大人にも大きな課題だろうと思いますし、英会話ができたら外国人と良いコミュニケーションがとれると思います。

(委員)

日々、子どもと接して、本当に子どもたちの持っているエネルギーは、大きいと感じています。まず学力の育成について、「学校に行くのが楽しいか」を指標としていることは、本当によいと思います。学校へ行くのが楽しい、だから学んでいく意欲も高まっていく。意欲が高まれば、習得していこう、考えよう、また新たな創造力を生み出していこう、とそういうものが育っていくと思います。その割合は急激に上がるものでないと思いますので、13年度に80パーセントは、適切な数字と感じました。

エネルギーがある子、いろいろな気持ちを持っている子、本当に子どもたちが多様化しているということを考えています。それぞれの子どもたちが、互いの良さや強みを受けとめ、ともに子どもたちを育てていけたらよいと日々感じながら、取り組んでいるところです。

今回、多様な子どもたちに対応するためにも、学校生活支援員の活用の充実を大切にいただいていることは本当にありがたいです。一人ひとり個性があり、また、課題もあります。そこに対応していける学校生活支援員は、学校において大きな力となりますので、支援員の活用の充実を明記していただけること心強く思いました。また、大勢の中で居ることの苦しさ等を感じるお子さんもおります。そうしたことも踏まえて、今回、多様な子どもに対応するために民間団体との連携も大切にしていこうということを明記していることも、子どもたちがいろいろな選択の一つとして持っていける、そのことで安心して、また学校に向かっていけると思いました。

(会長)

若者や子どもは、本当に様々なアイデアやエネルギーを持っていると思います。ともすると、大人がそれをうまく引き出したり、受けとめたりする場がもっと必要ではないかと思うところがあり、ぜひ、高松の様々な取組が、子どもたちが持っているエネルギーやアイデア、いろいろな意欲をしっかりと受けとめられるものとなり、受け皿がたくさんある高松市の教育になってほしいと思いました。

(委員)

多様な子どもたちが学校にいて、その子が何を必要としているのかを、しっかりと考えていくことが大事だと思います。特別支援教育では、教育的ニーズという言葉があります。今、その子にとって何が必要かは、その子の歩んできた今までの道のりと、これから先、行くであろう可能性のある道のりとの中間点に今いるということを大事にしながら、把握していく必要があります。

学校の先生だけでは難しいので、保護者や専門家や校内のOJT研修で上手く引き出して、実際に関わる支援員や特別支援学級担任が、自信を持って支援や指導にあたる体制があるとよいと感じています。いろいろなところとつながってよいというヒントが、計画の中にはたくさん盛り込まれていて、先生方が自信を持って、いろいろなところとつながって子どもを育てていく体

制が整っていくと、8年後は楽しみだと思いました。

もう1点は、指標はどうしても数値で判断して、90パーセントぐらいになると後は伸び悩んで、最後がなかなか達成できない場合や、目標値に達成したけれど、それはどう使っているのか聞くと、作っただけにならないように、この指標を活用していかなければならないと思います。子どもや保護者とか学校が、達成できたことでどう変わっていったのかというところを、事務局の方や教育委員会でしっかりと把握し励ましつつ進んでいけたらよいと感じました。

(会長)

非常に重要な御提案をいただいたと思います。我々は、指標を作ったり、測ったりするけれども、ともすると手段として使っていた数値が目的化してしまい、目的のその先の、それで子どもたちがどうなるかというところをもっとあるはずなのに、目的化した手段の方で満足してしまうことはあってはいけないという、非常に重要な御指摘だと思います。

(委員)

計画案を見させていただいて、三本柱のふるさとの未来を支える教育の推進と多様な教育ニーズ、学校・家庭・地域の連携とか、今の時代からこれから先、絶対にいる3大項目だなと思いました。これがある程度実現できたら、先が輝いたものになるという期待感があるのと同時に、やはり教育機関と教職員、地域の人達がいろいろやってくれるがために、親が丸投げしてしまうという傾向が進まないのかという心配があります。紙で配るとかウェブに載せるとかではなく、できれば学校関係の懇談会の場を借りて、市として一丸となって取り組んでいます、お父さんお母さんも興味を持って一緒に頑張っていきましょう、と対面した状態で伝えていけると、より伝わって、よいものになっていくと思います。現状、学校での懇談会では、何かについて討論するのは本当に少ないです。その時間をより有効活用して、皆で一丸となっていけるような企画を、どこかが連動してできると、一気に家庭の教育力が向上するのではないかと思います。

もう一つは、やはり現場の先生たちの負担がかなり増えると思います。個々のニーズに対応するために勉強しなければならない時間も増えると思います。その時間ではやりきれない部分もあれば、持ち帰って、ずっと心にあって切り換えができない先生方もたくさん出てくるのではないかと思います。子どもたちが学校が楽しいと行けるように、教職員の先生方も、ワクワクして学校に行って、仕事をして、子どもに接するというような環境づくり、専門的な分野をしっかりと専門に振り分けるとか、中身の働き方改革をしていただけるとよいのかなという、その2点が気にかかりました。

親としてできることは、私ども市PTA連の方も一生懸命訴えかけていきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

(会長)

とても大事なところを御指摘いただいたかと思います。やはりお父さんお母さんが、先生方がこれだけやってくれているのだから、もう学校にお願いしようとなると、困ってしまいます。学校にすべてお任せするというのではなく、お父さんお母さんと一緒に取り組んでいければと思います。今コミュニティスクールの取組も進んでいますし、いろいろな意味で御協力いただいて、皆さんと一緒に作っていくことがよいと思います。しかし、その中でやはり先生方の働き方改革は、大事な点であると思います。

(副会長)

多様なニーズに対応した教育の充実の特別支援教育の推進ですけれども、現在の項目では、全国学力・学習状況調査の項目の1項目の中の比率で、「よく行った又はどちらかといえば行った」という項目の合計数値で算出されていて、果たしてこの項目をこのまま踏襲で良いでしょうかという御提案です。2009年に特別支援教育に変わって、今14年目、2031年の段階の時には23年目になります。子どもたちの、特別なニーズのある子たちへの学習環境を、「どちらかといえば行った」の割合が52.6パーセント、「よく行った」の41.7パーセントが、令和4年度の全国平均の実績値ということです。

令和6年の4月1日から、民間も含めた合理的配慮の実施が義務になります。今までは、いわゆる行政とか国の機関は義務で、民間は努力義務といわれたものが、全員義務と変わっていきます。つまり、学校教育は私立公立関係なく、障がいのある子への教育的な保障は、努力しますではなくて、やらなければならないもの、という観点に立った時に「どちらかといえば行った」という回答も含めて、そこを目指して100パーセントにしますというのは、果たして、目標値の設定として正しいのでしょうかというところを、一度再考いただけたらと思います。

ただ、全国的な傾向とのバランスですとか、いろいろな根拠としての経年的な評価としても必要だということもあるかと思いますが、個人的な意見ということで踏まえていただけたらと思いますが、いろいろな事情を考えると、ここの評価値の設定をあえて「よく行った」を高めていくのに置き換えることも一案かと思いますが、例えば、香川県の学力・学習状況調査の項目に、特別支援教育の項目を今後入れて評価にするなど、時代の時流に合わせた評価項目として、これから8年間設定するものとして、再考いただけるとよりよい評価軸になっていくのではないかと思います。御提案させていただきたいと思います。

(会長)

特別支援教育の推進と指標について具体的な御意見でしたけれども、いかがでしょうか。

(事務局)

特別に個別に支援をしていく、本当に大前提であるところかと我々の方も認識いたしております。

ます。ここでは一応肯定的な、そのような対応を行ったという学校全体を見ての肯定的な回答の割合を指標とさせていただいているところです。今御指摘いただいた点も踏まえて検討して参りたいと思います。

(会長)

先ほど、先生方の働き方改革のお話がありましたけれども、1番気になっていまして、今回、支援員の方やコミュニティスクールの取組など、関連する内容がいろいろな形で各項目に散りばめられている感じがしています。

もちろん1番よいのは、予算がついて、市費講師を高松市が雇用することになればよいのですが、先生方の仕事をいろいろな形でサポートされる方が入る、多方面からアシストが入る方法もあると思います。内容をよく見ると、いろいろなところにサポートがあるけれども、一見してよく分かりません。先生方が職務に専念できるように環境整備しているところが、今の段階では見えづらくなっています。その辺のアピールの仕方といいますか、整理されて見えるようになると思うのが1点目です。もちろん、将来的な話ですが、今後、市費講師を多く採用してほしいという要望はあります。

2点目ですが、様々な多様性のお話がありました。学校や地域、いろいろな場の中で、大人がそれを受けとめられるよう、我々自身も意識を変えていかなければいけません。学校の中でも、大人がそうした多様性を受けとめられるような環境が果たしてきちんと整っているか、或いは皆の意識がついていっているのか、非常に気になります。

その中で、子どもたちが言えたらよいが、言いたいのに言えない、ということの後押しする意味で、こども基本法が重要です。子どもたちが自分たちのニーズや意見を言えるということが大事になってきています。我々がそういう受け皿を持たないことで、子どもたちが内に籠って、場合によっては不登校に通じるのかもしれないと考えると、いろいろな意味で子どもたちの意見を聞き、しっかりと認めることが大切です。学校の文化とか雰囲気とか、民主的なその関係性を定着させるということは、日本だけでなく世界的にも重要になってきています。特に今回、調査でドイツの取組を見て参りましたが、決して日本は大丈夫だろうとは言えません。日本も、もちろん高松市も子どもたちの意見を聞くことに力を入れる、或いは先生方にもそういう意識を持ってもらいたいと思います。前回も申し上げたわけですが、子ども達は言っているんだよ、権利を持つてるんだよ、という、こども基本法の理念をしっかりと伝えていく必要があります。我々大人には、子どもたちの意見をしっかりと受けとめ、対応していく場や機会を設けていくということが求められています。子どもたちが、自分は自分のままでいいんだと感じ、自分の力を生かして、高松市に或いは日本にも貢献するということにつながっていく、その一番大事なところを、特に学校教育の中で進めてほしいと思います。

本日、委員の皆様には、貴重な御意見をたくさんいただき、いろいろな観点が見えてきたと思います。ありがとうございました。それでは、事務局の方にお返ししたいと思います。

(事務局)

委員の皆様方には、御多忙の中、本懇談会に御協力いただきましたこと、心よりお礼申し上げます。今後も御指導御協力を賜りますようお願い申し上げます。閉会いたします。

本日はありがとうございました。